SDIパラダイムシフト: 生成AIによる特許調査の再定義

「読む」から「判定と根拠を確かめる」組織への移行戦略と2026年の市場動向

対象：知財戦略・研究開発リーダー



2026-2027
Strategic Outlook

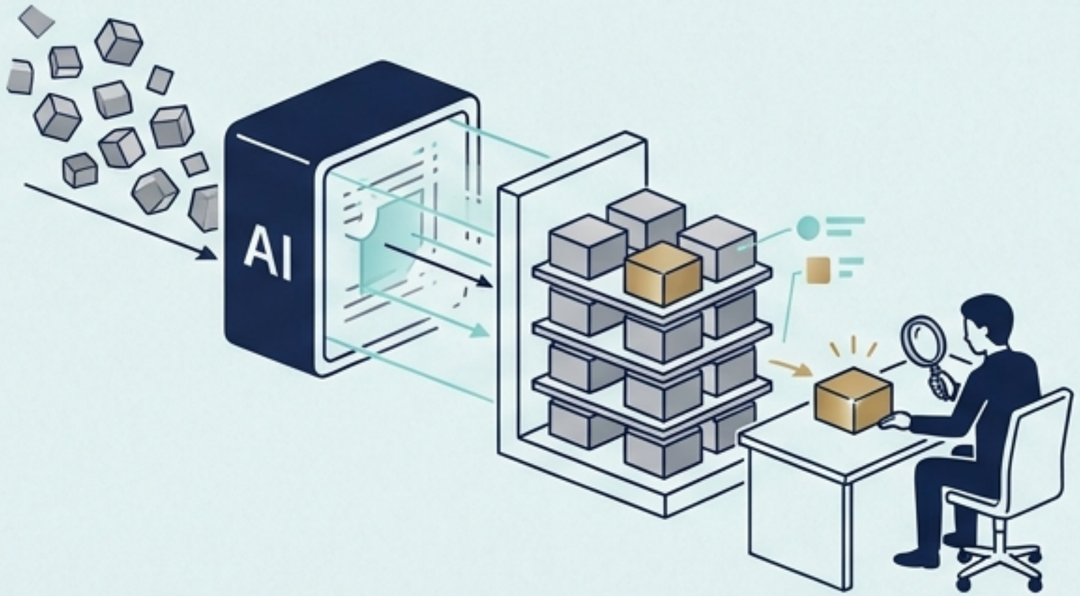
Gemini Notebook

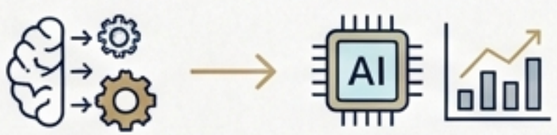
SDI調査の基本パラダイムが「公報を大量に読む」作業から、「AIの判定結果とその根拠を検証する」プロセスへと不可逆な変化を遂げた。

従来のSDI（〜2023）



生成AI時代のSDI（2025〜）





判定：人間 → 生成AI（関連度スコア+理由付け）



役割：読解・仕分け → 評価基準の設計・品質監査



焦点：全件スクリーニング → 境界事例の検証

Gemini Notebook

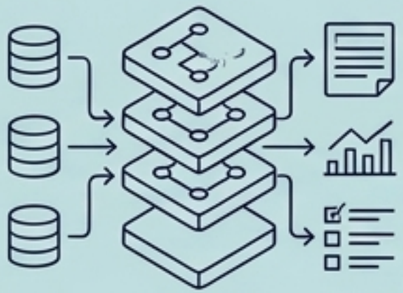
Phase 1:
教師ありAI分類
(2018〜2023)



過去の判定結果（正解ラベル）を学習。カネカ等の事例で工数削減効果出現するが、コールドスタート問題や教師データの質に依存。

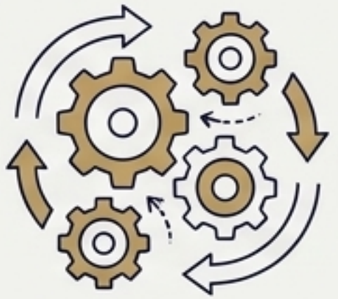
Phase 2:
生成AIによる要約と判定
(2024〜2026)

現在地
(You Are Here)



日立、JP-NET、サマリア等が一斉に生成AI機能を商用化（要約、一致度順位付け、検索式生成）。島津製作所など、AI除外分の目視確認を廃止する企業も登場。

Phase 3:
AIエージェントと自律化
(2027〜)



MCP/RAG対応により、評価結果を学習した検索式の自動修正や、研究者の関心に基づく個別配信（継続的競合インテリジェンス）への進化。

Gemini Notebook

生成AIによる「要約」と「検索式生成」はすでに標準機能となり、競争の軸は「自律的判定と根拠の可視化」へ移行している。

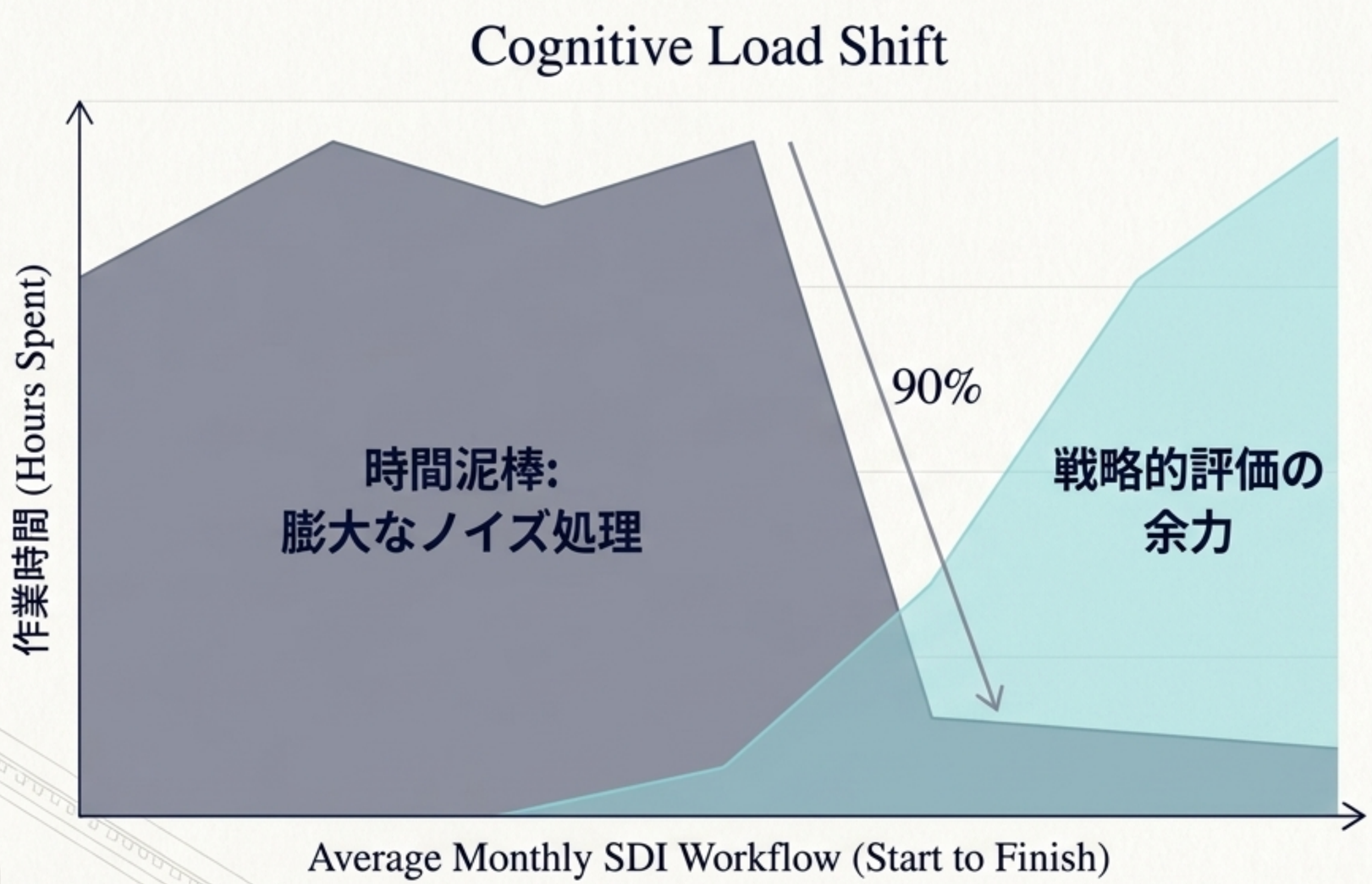
	Shareresearch	JP-NET	サマリア	Patentfield	Orbit/Derwent
AI要約	●	●	●	◐	●
独自の判定・根拠出力	◐	—	●	—	◐
検索式・母集団生成	●	●	●	●	◐
外部連携/MCP	—	—	●	—	—

日立 Shareresearch: 2026年10月5日よりAI要約・AI検索を提供開始。一致度の順位付けを実装。

JP-NET: 2026年10月より「生成AIオプション」を有料化（月額完全固定制・包括2万円〜）。

サマリア: 2026年5月にSDIと生成AIの一括処理を接続。9月にはMCP対応を発表し、独自エコシステム構築を牽引。

Gemini Notebook



日立社内検証

- 確認時間: 約5分 → 約30秒
- 精読対象: 100件 → 20件

（確認時間を最大90%削減）

パナソニック事例

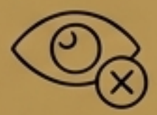
- 作業時間: 10時間 → 5時間

（年間1,800時間の削減）

【価値のシフト】
膨大なノイズ処理による疲弊と属人化から脱却し、浮いたリソースを「評価基準の明文化」「AIの精度監査」「境界事例（Edge Cases）の戦略的判断」へ再投資する。

Gemini Notebook

Risk & Mitigation Dashboard

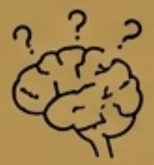


【リスク 1】
見落とし（再現率低下）

AIの過剰なノイズ除外による致命的な特許の見落とし。ベンダーは結果の正確性を法的保証しない。

【処方箋】

FTO調査においては、AIを「除外役」ではなく「優先順位付け役」として運用する。

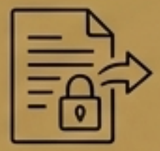


【リスク 2】
ハルシネーションと欠落

要約文の生成過程で、重要な構成要件や請求項の微細な差異が切り捨てられる危険性。

【処方箋】

結論のみを出力させず、必ず「評価根拠の段落」と「請求項の構成要件ごとの対比」を出力させる設計を必須とする。



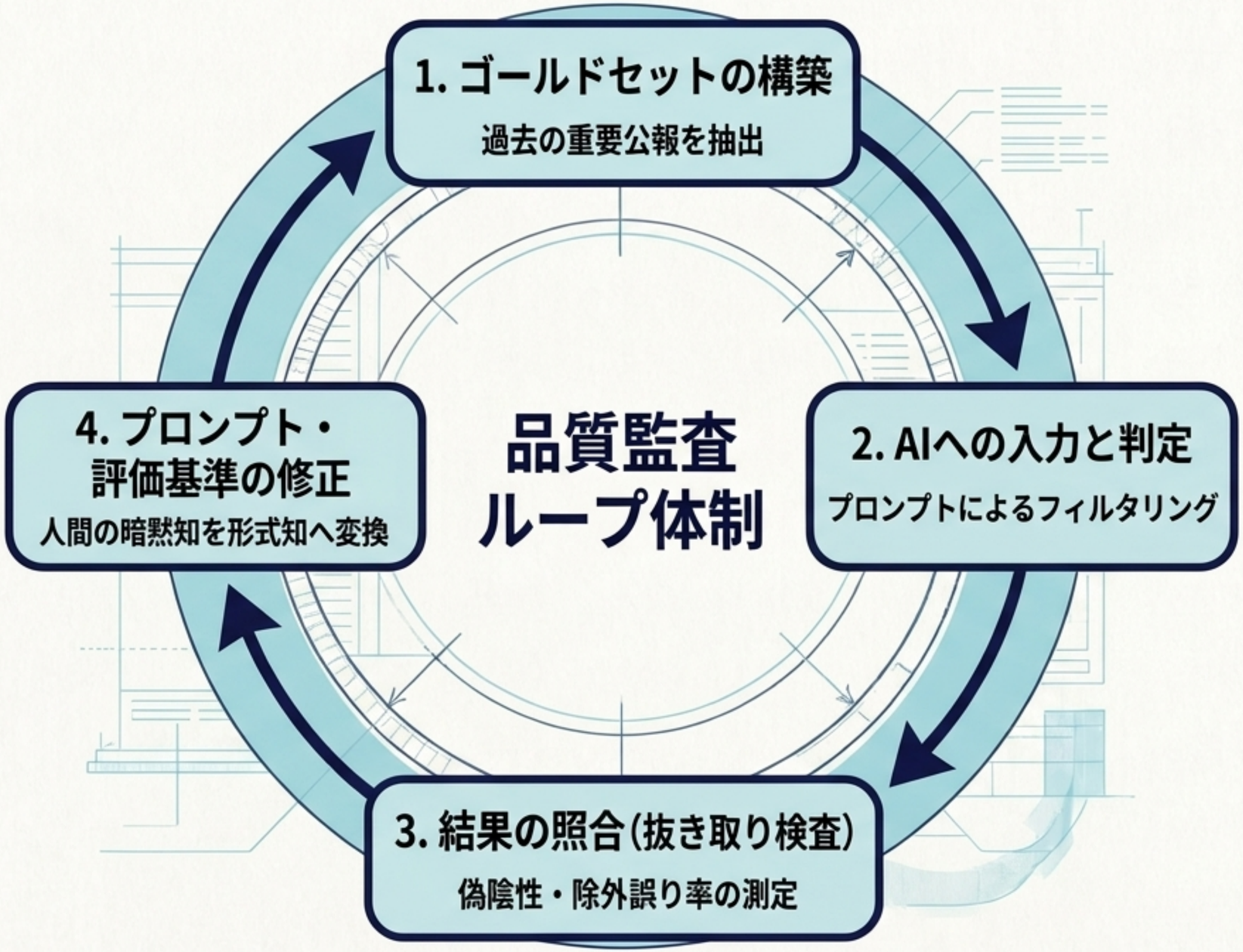
【リスク 3】
機密情報の漏洩

自社の未公開製品仕様や開発テーマをプロンプトに入力することによる外部送信。

【処方箋】

情報区分ごとに入力許容範囲を策定。社内知見との突合は、社内環境側で処理するMCPやRAG構成を優先する。

Gemini Notebook



「ゴールドセット」による品質担保の必須化

数値（重要文献再現率・除外誤り率）が出ていない段階で、人間の再確認を即座に全廃してはならない。
このループは、熟練者のノウハウ（必須要件、許容される置き換え、除外基準）をプロンプトという「形式知」へ変換・継承する不可欠なプロセスである。

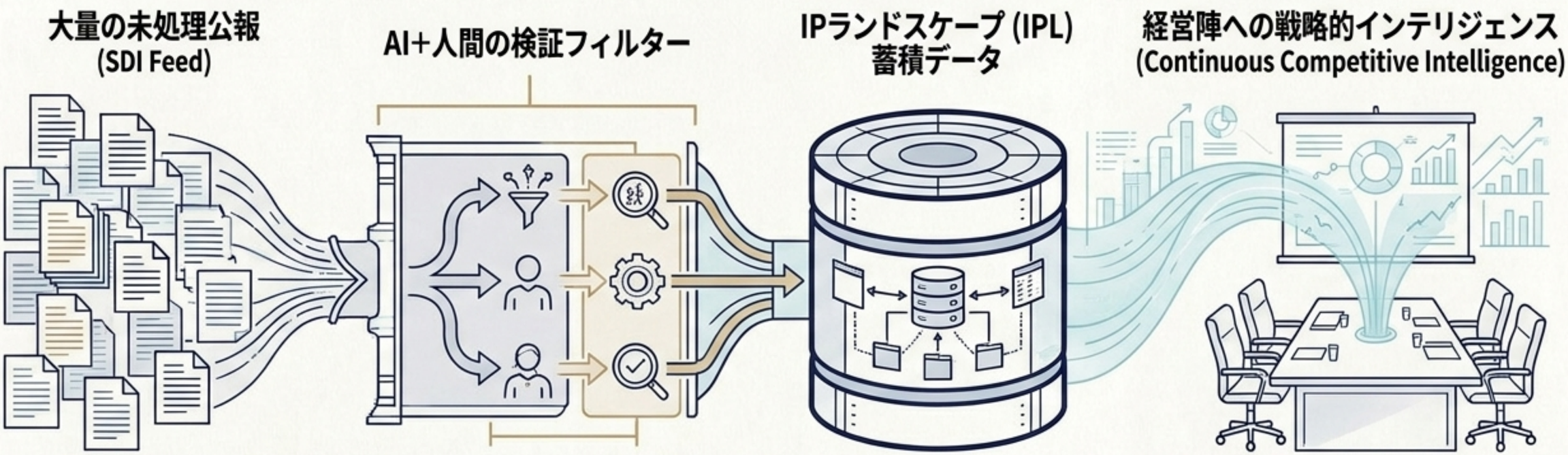
Gemini Notebook

目的別SDIの3層と役割分担

	AIの役割	人間の役割	リスク許容度
Layer 3: 探索 (Low Risk)	自由な壁打ち、未踏領域の概念抽出。	アイディエーション。	誤謬もインスピレーションとして許容。
Layer 2: 競合・技術動向 (Medium Risk)	要約作成、技術観点ごとのフラグ付け、一次分類。	配信内容の承認。IPランドスケープへの流し込み。	多少のノイズは許容し、速度と網羅性を優先。
Layer 1: FTO 監視 (High Risk)	関連度順の並べ替え、構成要件の対比、判定根拠の提示まで。	「除外（ノイズ判定）」の最終判断。	見落とし（再現率低下）は絶対に許容不可。

Gemini Notebook

SDIの昇華：「公報配信」から「継続的競合インテリジェンス」へ



2029～2031年に向けた展望：SDI は独立した「作業」ではなくなる。AI によって均質に評価・ランク付けされたSDI データは、IPランドスケープ分析を裏で支える高鮮度な「教師データ」として蓄積され、 経営層への動的なインテリジェンス供給エコシステムへと進化する。

Gemini Notebook

組織が直ちに実行すべき3つのアクション

1 AI利用範囲の明文化

FTO、動向監視、探索の3層で、AIの利用限界（特に「除外」の権限）を社内ルールとして定義する。

2 品質監査ループの実装

テーマごとに「ゴールドセット」を構築し、AIの除外誤り率を定期測定する抜き取り検査を制度化する。

3 暗黙知のプロンプト化

熟練技術者の検索の勘所や除外基準を言語化（形式知化）し、AIの精度向上と若手へのスキル継承を同時に実現する。

知財部門の価値は、「膨大な公報を読むこと」から「精緻なインテリジェンスの濾過装置を設計・統制すること」へと完全に移行した。

Gemini Notebook